大塚ホールディングス株式会社発行
『大塚薬報』2022年10月号より

高知県・社会医療法人仁生会 細木病院

〒780-8535 高知市大膳町37番地
https://www.hosogi-hospital.jp

●院　長：細木信吾
●設　立：1946年
●病床数：456床
●診療科：総合診療科、内科、呼吸器内科、消化器内科、循環器内科、糖尿病内科、内分泌内科、腎臓内科、心療内科、精神科、外科、消化器外科、肛門外科、乳腺外科、血管外科、脳神経外科、整形外科、小児整形外科、リハビリテーション科、心臓リハビリテーション科、リウマチ科、化学療法・緩和ケア科、小児科、神経小児科、耳鼻咽喉科、皮膚科、形成外科、泌尿器科、放射線科、麻酔科、歯科

救急から在宅までをカバーする地域中核病院

地域住民に寄り添い76年

社会医療法人仁生会 細木病院（細木信吾院長・456床＝一般162床、療養153床、精神141床）は、31の診療科と10の専門外来を有し、高知市の高知城近くの住宅街に位置する。

戦後間もない昭和21年（1946）7月、細木診療所として“産声”を上げたのが始まりで、今年、開設から76年を迎えた。これに伴い4月に細木一族の3代目に当たる細木信吾氏が同院院長に就任した。病院に改組したのは、昭和30年（1955）11月のことだが、今日に至るまで、診療所以来の地域密着型を標榜し続けてきた。その間、同院のハード、ソフト両面における発展ぶりは目覚ましく、現在は地域の中核病院の一つとして、地域包括ケアシステムの中心的役割を担っている。

特に平成に入ってからは、先端医療機器の導入や専門病棟の開設などを次々に実現し、これに伴う数々の施設認定も取得している。それが31にも及ぶ診療科と10の専門外来を標榜することにもつながってきた。現在、同院の1日平均の外来患者数は416.6人、年間手術件数は494件となっている（令和3年度）。

一方で、同院在宅部が運営する在宅医療や福祉関連の施設も院内・院外に開設してきた。内訳は、居宅介護支援事業所2カ所、訪問看護ステーション、訪問介護ステーション、訪問リハビリテーション、通所リハビリテーション2カ所、認知症対応型デイサービス3カ所、地域密着型デイサービス、認知症対応型グループホーム6カ所、精神グループホーム3カ所、サービス付き高齢者住宅（37室）、上街・高知街・小高坂地域包括支援センター（高知市委託事業）である。

こうした社会医療法人としての医療、福祉機能の間口を広げることによって、地域の期待に応える体制が整えられ、地域社会における役割も大きくなってきたことはいうまでもない。その結果、法人内の医療、福祉における連携のみならず、主に高知県中

訪問診療
グループホームで毎月1回実施する。

央医療圏すべてにまたがる骨太な地域連携が実現できるようになってきた。

細木院長は「これからも子どもからお年寄りまで、救急から在宅まで、シームレスな医療を行い、いつも地域からの声に耳を傾け、地域の人々に寄り添う病院であり続けたい」と語る。

2 室目の心臓カテーテル室が完成

同院は構造的に見ると独特である。というのも、敷地内に本館、新館、北館、南館が独立して立っているのだ。さらに、周囲には管理棟や福祉施設などがある。これは同院の長い歴史の中で発展するに従い、増設を繰り返した結果なのだ。敷地全体を俯瞰してみると、「ほそぎ医療モール」とでもいった趣か。院内を案内されるうちに、結果的にこれが存外、初診以外の患者や家族にとっては、それぞれの施設が自分にとっての「かかりつけ」の場になり得る構造になっていることに気付いた。

本館、新館、ほそぎハートセンター、北館、南館の順で案内してもらった。

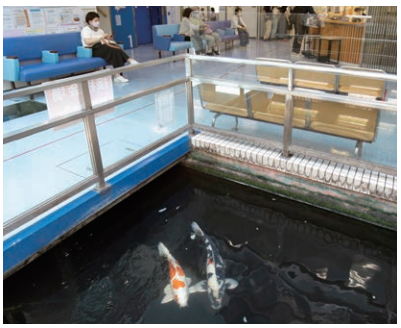
6階建ての本館は1階に総合案内、外来受付、会計、薬剤室、MRIおよびCT室、外科、整形外科、ペインクリニックの各外来と救急処置室がある。2階は総合診療科、循環器内科、内科、

〈本館〉

救急入口とドクターカー・ナースカー
中央は曽我貴美子外来師長

診察室
デジタル掲示板で担当医師や次の診察患者の番号を知らせる。

健康管理センター
付加健診やオプション検査にも対応している。



鯉の泳ぐ池
屋内でメンテナンスは大変だが、餌を与えられる時間もあり、患者や家族の憩いの場となっている。

〈新館〉

入退院サポートセンター　入退院サポート室と患者サポート室があり、入院前から入院中、退院に至るまで、切れ目なく質の高い支援の提供に努めている。

高行記念講堂　さまざまな講演やイベントなどに使用している。取材時は新型コロナワクチン住民接種を実施していた。

創始者 細木高行の胸像

〈ほそぎハートセンター〉

外観　令和 2 年（2020）にオープンした。

心臓カテーテル室 1　細木院長がセンター長も兼任している。フィリップス社製 2 方向血管撮影装置 Azurion7 B12/12 を設置

心臓カテーテル室 2　カテーテル室 2 室とも患者の好きな音楽を聴くことができ、検査・治療中でもリラックスできる。

操作室　DVx 遠隔映像配信システムを導入し、検査室以外でも血管造影画像のリアルタイム閲覧ができる。

レッドコード（スリングエクササイズセラピーツール）　ほかに心肺運動負荷試験（CPX）、自転車エルゴメーター、セントラルモニター心電図を備える。

専任の医師（心臓リハビリテーション指導士）、看護師、理学療法士らのチーム　中央は西本美香心臓リハビリテーション科部長

小児科外来と各種検査室、小児リハビリテーション室だ。3 階は放射線室、4 階は脳神経外科、耳鼻咽喉科、皮膚科、形成外科、泌尿器科の各外来と化学療法室。5 階が健康管理センター、6 階が内視鏡センターおよび栄養指導室となっている。

本館に隣接する新館は地下 1 階、地上 5 階の建物で、地下 1 階に「ほそぎ入退院サポートセンター」、ほかに創業院長の名を冠した「高行記念講堂」、会議室、ローソン仁生会細木病院店がある。1 階から 3 階は病棟だが、1 階が回復期リハビリテーション病棟（療養 52 床）、2 階が地域包括ケア病棟（一般 60 床）、3 階が一般急性期病棟（DPC 適用、一般 60 床）と棲み分け、4 階が手術室、病理検査室、薬剤室で、5 階が理学、作業、言語の各療法室および訪問リハビリテーション機能を有するリハビリテーションセンターだ。

さらに本館に隣接し、循環器を専門とする細木院長がセンター長を務める心臓カテーテル治療と心臓リハビリの専門施設「ほそぎハートセンター」がある。1 階が心エコー、心臓リハビリテーション室で 2 階に心臓カテーテル室がある。今年 6 月、新たに 2 室目の心臓カテーテル室が

完成した。これによって、「これまで以上に緊急性のあるカテーテル治療や複雑なカテーテル治療に対応できる」（細木院長）ということだ。

「こころのセンター」と称する北館は、精神科医療を専門とする施設として機能している。1階は精神科、心療内科、内科、歯科、重度認知症デイケア「デイ・アルテン」があり、ここにも独自の外来受付、会計がある。2階は精神科デイケア・ショートケア「フレンズ」のほか、脳波室、機能訓練室、医療安全管理室、院内感染対策室がある。3階から5階は精神科病棟で、閉鎖病棟（103床）、開放病棟（38床）で構成されている。3階には患者サポート室、臨床心理室、心理検査室があり、6階は多目的ホールとなっている。

南館も病棟だが、1、2階が医療療養病棟（療養101床）で2階にはリハビリテーションセンターが置かれている。3階も病棟だが、ここは障害者施設等一般病棟（一般30床）と「ポピー病棟」と呼ぶ緩和ケア病棟（一般12床）がある。特にがん患者がさまざまな苦痛を取り除き、心穏やかに過ごしてもらうことを目的としたポピー病棟は、明るく落ち着いた雰囲気だ。

夕スクシフトの実現を目指す

細木院長は、これまでに同院が培ってきた地域からの信頼に裏打ちされた実績を継承し、さらに「地域住民に必要とされる病院」であり続けるために、令和4年度（2022）のスタートに当たって、「患者さんの満足度向上」、「職員の働きやすく働き甲斐のある職場づくり」、「新型コロナウイルス感染症対応の強化」、「経営基盤の安定と強化」の4つを目標として掲げた。いずれも当たり前の目標といえるが、このアクションプランを策定することはなかなかに難しい。だが細木院長は今年度初めに、年度中に実現させるこれにひもづく具体的なアクションプランを表明し動き出した。

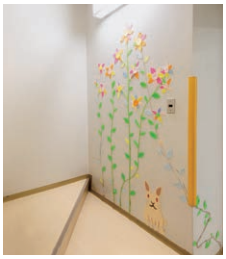
「患者さんの満足度向上」については、外来のデジタル掲示板による患者呼び出しシステムの導入、最新のMRIへの更新、ほそぎハートセンター第2カテーテル室の始動が実現した。心臓リハビリ・検査室の拡張、急性期病棟である新3病棟の改装も予定されている。さらにこれらのハード面の機能強化に加え、患者および

〈北館（こころのセンター）〉

ロビー　患者らによるアート作品を随所に飾る。

歯科診察室　細木弓子歯科医師が診察する。入院患者以外に一般外来も受け入れ、英語、スペイン語での対応も可能

病児・病後児保育室キュービットハウス　病気の回復期などで集団保育や家庭での保育が困難な市内在住の子どもを預かる。



認知症対策室 DCTと重度認知症患者デイ・ケア「デイ・アルテン」　廊下や階段などをスタッフと患者が作ったフェルトの飾りで彩っている。

薬剤部　チーム医療に積極的に参画し、タスクシェア・タスクシフトにも主体的に取り組んでいる。前列左より2番目は田中照夫薬剤部長、その右が小松めぐみ副部長

ほそぎ10分ミーティング
全員が毎朝参加する。合言葉は、「あなたHAPPY♡わたしHAPPY♡みんなHAPPY♡」

その家族へ同院に対する要望や意見のアンケート、職員の接遇向上に向けた研修などを実施している。

2つ目の「職員の働きやすく働き甲斐のある職場づくり」に関しては、職員の仕事負担軽減のために、例えば医師の場合、夜や休日は当直医が、当直翌日は代診医が対応するタスクシェアを徹底し、これまで医師が書いてきた診断書やレポートは、医療秘書が代行し医師の負担を軽減するタスクシフトを始めた。しかもこのタスクシェアとタスクシフトは医師に限ったことではない。さまざまな職種において行われることで、すべての職員にとって働きやすい職場環境を整えているのだ。

薬剤部を訪ねた際にも、田中照夫薬剤部長がチーム医療への積極的参画とタスクシェアおよびタスクシフトに主体的に取り組んでいることを強調して語ってくれた。まさに同院におけるチーム医療への認識はあらゆる部署に浸透している。多岐に及ぶ診療科を標榜し、多彩な医療、福祉関連サービスを提供、さらに施設が独立した立地となっているにもかかわらず、院内コミュニケーションをうまく機能させるためには、有効な施策なのだと実感した。

また、今年度より福利厚生検討委員会が発足し、より充実した福利厚生に努めている。早速、同委員会の提言でシエスタと福利厚生倶楽部の導入が決まった。シエスタによって午後の業務がより効率化し、節電にもなるという。このような職員の働きやすく働き甲斐のある職場づくりに対する努力は、同院の伝統の一つとして特筆されるべき点で、このことが認知されているからこその結果だといえよう。

現在、同院では細木院長が「出勤する医師、看護師だけでなく、病院すべてのスタッフが参加し、職員誰もが遅滞なく情報共有ができて、連帯感が持てるようなミーティングにしたい」と考えて始めた「ほそぎ10分ミーティング」（月～金曜日の8時半～10分間）という朝礼をWEB上で行っている。わずか10分でさまざまな職種のスタッフが発言するものだが、この効用は院内における職種間の理解促進にある。この10分ミーティングの合言葉は、細木院長の病院運営のモットーでもある「あなたHAPPY♡　わたしHAPPY♡　みんなHAPPY♡」ということだ。

3つ目は今日的課題である「新型コロナウイルス感染症対応の強化」である。現在も厳格で気を抜くことのない感染対策と職員の行動制限などを継続して行っている。最近まで新型コロナウイルス感染症には2人の感染症の専門職員で対応していたが、これだと個人にかかる負担が大きくなってきたことから、この点でもタスクシェア・タスクシフトを行って対応することにした。感染対策は新型コロナウイルス感染症の出現で、結果的に従来にも増してブラッシュアップされたともいえる。さらに地域においても他の医療機関と連携を取り、地域における感染対策の基幹的な役割を担っていくことを宣言している。

開設以来、76年を迎えた同院だが、その進化は止まることがない。地域の患者にとっての満足、そして同院で働く職員の働きやすさと働き甲斐をずっと希求し続けてきたからだ。細木新院長率いる同院は、これから設立100年に向けて再び力強く歩み始める。